The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「気づく」に関する一考察 ： 「知る」との対比において
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	語文. 1988, 51, p. 23-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「気づく」に関する一考察

――「知る」との対比において――

藤田保幸

キーワード：「気づく（気がつく）」、「知る」、「悟る」、「引用」、叙実動詞

1　この稿では、「気づく」という我々の知的営みがいかなるものであるかということを、「気づく」「気がつく」ということばに即して検討する。特に、ここでは、「知る」との対比を通して、「気づく」の特質を浮かび上がらせるという方法をとる。

考察に先立ち、あらかじめ次の点を限定しておきたい。「気づく」「気がつく」両形式をとりあげるが、これらが、両者に共通する「（意識していなかった事物が）意識にのぼる」といった意味で用いられる場合についてのみ問題とする。「気がつく」の方には、それ以外の意味（「配慮が行き届く」「意識をとりもどす」）も認められるが、それらは、ここでの考察の範囲外である。以下、「気づく」「気がつく」は一括して、「気づく」として言及していく。

2―1　「気づく」を「知る」と対比して考えようとするのは、次のような点に注意するからである。

(1)―a　彼はそれが正しいと思ったが、実はそれは誤りだった。

(1)―b？彼はそれが正しいと知ったが、実はそれは誤りだった。

(1)―c？彼はそれが正しいと悟ったが、実はそれは誤りだった。

(1)―d？彼はそれが正しいと気づいたが、実はそれは誤りだった

aの「思う」の場合と比較すると明らかだが、引用句「〜ト」に出てくる主体の思惟・認知の内容が実は誤りだったというような文脈では、「知る」「悟る」「気づく」のような動詞は用いることができない。ということは、こうした動詞は、思惟・認知の内容（通常「補文命題」と呼ばれる）が真であるという前提のもとに用いられるものといえる。[1] このような動詞は、「叙実動詞」と呼ばれる。[2]

叙実動詞であり、一つの真なる内容を認識するものだという点で、「気づく」は「知る」や「悟る」と一面で極めて近い意味を示すものといえよう。実際、「〜ト気づく」と「〜ト知る」「〜ト悟る」のような「引用」の表現を例に考えてみても、「気づく」と「知る」「悟る」を相互に交換しても事柄的意味はほとんど変わらない場合が多い。

(2)―a　その胴体が、今日腑分けせられるのだと気が付くと、六人はちょっと不快な感じをいだかずにはいられなかった

（菊地寛「蘭学事始」）

(2)—b　その胴体が、今日腑分けせられるのだと知ると、六人はちょっと不快な感じをいだかずにはいられなかった。

(2)—c　その胴体が、今日腑分けせられるのだと悟ると、六人はちょっと不快な感じをいだかずにはいられなかった。

(3)—a　もし陽子が本当の妹でないと知ったなら、徹は一体どうするだろうか。

（三浦綾子「氷点」）

(3)—b　もし陽子が本当の妹でないと気づいたなら、徹は一体どうするだろうか。

(3)—c　もし陽子が本当の妹でないと悟ったなら、徹は一体どうするだろうか。

(4)—a　どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて画が出来る。

（夏目漱石「草枕」）

(4)—b　どこへ越しても住みにくいと気づいた時、詩が生れて画が出来る。

(4)—c　どこへ越しても住みにくいと知った時、詩が生れて画が出来る。

このように一見同じように用いられる「気づく」と「知る」「悟る」にも、一方で何らかの意味の相違があるものと感じられる。このうち、「悟る」は、哲学・宗教的コンテキストで用いられることも多く、そうした内容ともかかわるある種のニュアンスをもつものだと思われるので、ここではいったん措く（この点、最後に補足として少しだけふれる）。以下では、「気づく」を「知る」と対比することによって、その意味の相違を考える。それによって、我々の真理認識の営みとしての「気づく」の特質が浮かびあがるのではないかと考えるのである。

2—2　考察は、次のような手順をとる。

1　まず、「〜ニ気づく」と「〜ヲ知る」という格成分（対象格）をとった形について比較することから、「気づく」「知る」の相違（と重なり）について見通しをつける（**3—1**〜**4**）。

2　そこでの見通しが、「〜ト気づく」と「〜ト知る」の「引用」の表現の分析とも照応するものであることを示す（**4—1**〜**4**）。

このような方法をとることについては、一つの思わくもある。「〜ト気づく」「〜ト知る」のような「引用」[3]は、筆者の用語・分類でいえば、β類の「引用」である。β類とは、「〜ト」でひかれる現実の発話・思惟と述語動詞の示す動作等が事実上等しいという関係で結びつくものである（例えば、「あの人だと気づく」の場合、「あの人だ」という現実に心の中に起こった思惟が、すなわち「気づく」という行為に他ならない）。「〜ト気づく」「〜ト知る」のような「引用」の構造は、「気づく」「知る」といった思惟・認知の内実が引用句「〜ト」にひかれていわば照合される形で結びついたのともいえよう。従って、「〜ト気づく」「〜ト知る」のような「引用」の分析、殊に「〜ト」の内部（引用内部）の分析は、「気づく」「知る」という営みの内実（心の中で起こっている（と少なくとも我々が直観的に思っている）こと）をいわばのぞき込むようなものなのである。こうした内実を観察する分析と、格等の意味—統語的特徴から動詞の意味に接近していく分析とが相応じるものであることを示したいと思う。そして、格等の側面からの分析と「引用」の側面からの分析がお互い支えあって有効

性を持ち得るといったことをここで示してみたいのである。

3—1 まず、格の側面から検討する。「気づく」と「知る」は、それぞれ「〜ニ気づく」「〜ヲ知る」のような格成分をとる。ニ格とヲ格の相違はあるものの、いずれも、「気づく」「知る」が認知的にかかわる対象（モノ・事柄）を示すといってよい。しかし、その対象とのかかわり方も、「気づく」と「知る」とでは当然異なりがあるのであって、両者のずれと重なりは、格成分として出てくる対象と「気づく」「知る」との意味関係を観察・対比することによって、比較的はっきり出てくるところがある。ずれと重なりを最も端的におさえるためには「〜ニ気づく」「〜ヲ知る」の諸例について、それぞれ「気づく」と「知る」を置きかえてみて（もちろん助詞もそれに伴って代わる）、ほぼ同義的かずれが生じるかをテストするようなことが手掛りとなろう。便宜上「〜ニ」「〜ヲ」の「〜」の部分をNと呼ぶ。

予め、結論的なことを述べれば、Nがモノを表わす名詞句の場合、「知る」と「気づく」を交換することは難しいのがふつうである（交換すると事柄的意味が異なってくるか、意味をなさなくなる）。つまり、この場合、「気づく」と「知る」の意味のずれが表に出てくるのである。しかし、Nが事柄を表わす名詞節相当のものの場合、あるいは、事柄内容をもった抽象物（「真相」「事実」「気持」等々）を示す名詞句でその内容面が認識対象となる場合などは、「知る」と「気づく」を交換しても文の事柄的意味はほとんど変らないことがふつうである。すなわち、この場合には、「気づく」と「知る」の意味の重なりが目立ってくるのである。

(5)—a　代助は守宮（やもり）に気づくごとにいやな心持ちがした。
　　（夏目漱石「それから」）

(5)—b　?代助は守宮を知るごとにいやな心持ちがした。

(6)—a　運命の二字は昔から知っていたが、ただ字を知っているだけで意味は分らなかった。
　　（夏目漱石「坑夫」）

(6)—b　?……、ただ字に気づいているだけで意味は分らなかった。

(7)—a　……番頭に助けられながらそれが小作證書であるのを知った時には、もう一層の絶望が彼の心を打った。
　　（宮本百合子「禰宜様宮田」）

(7)—b　……番頭に助けられながらそれが小作證書であるのに気づいた時には、もう一層の絶望が彼の心を打った。

(8)—a　新右衛門は、右手の斜面に人影が隠見するのに気づいていた。
　　（津本陽「塚原卜伝十二番勝負」）

(8)—b　新右衛門は、右手の斜面に人影が隠見するのを知っていた。

(9)—a　誠一郎は、事件の真相に気づいて憤った。

(9)—b　誠一郎は、事件の真相を知って憤った。

すなわち、一般化しておくと、「〈モノ〉に気づく」と「〈モノ〉を知る」の場合には、「気づく」と「知る」の意味のずれが目立ち、「〈事柄〉に気づく」と「〈事柄〉を知る」の場合は、「気づく」と「知る」の意味の重なりが目立ってくるといえるようである。この点、それぞれについてもう少し詳しくみてみよう。

3—2 Nにモノを示す名詞句がくる場合について、「〈モノ〉に気づく」と「〈モノ〉を知る」の典型的な例を掲げてみよう。

便宜上、「知る」の方から示す。「知る」は多義であるといわれるが、手許の用例等をも参照し、さしあたり次のようなものを典型

例として示しておく。

① ドイツ語を知っている／？知った。
② 礼儀を知っている／？知った。
③ 人の情けを知っている／知った。
④ 男女の仲を知っている／知った。
⑤ 佐藤を知っている／知った。
⑥ 彼の住所を知っている／知った。
⑦ 赤トンボの歌を知っている／知った。

①②は「身につけている」意が強く、ふつう「知っている」の形で用いられる。③④は「体験として」というニュアンスが強く、「知っている」の形で「わきまえている」（それを理解しないふるまいはしない）といった含意が感じられることが多い。その点、①②とも近さが感じられる。⑤⑥⑦は「知識・面識として」の意が中心である。以上は、一応の検討の目安として典型的な読みでの例を掲げたものである。

右の例について、「〜ヲ知る」を「〜ニ気づく」と置きかえると、いずれも、もとのものと意味が大きくずれるか、意味をなさぬものになってしまう。

①'？ドイツ語に気づいている。
⑦'？赤トンボの歌に気づいている。

例えば、①'⑦'は何とか意味をとろうとすれば、「ドイツ語」「赤トンボの歌」がきこえていることを意識している意とでも読めようが、ともかくも、もとの意味からはっきりずれてしまうのである。

なお、⑥⑦に一見似た例で、

(10)—a 事件の犯人を知っている

のような例は、「気づく」と置きかえても大きなずれは感じられない。

(10)—b 事件の犯人に気づいている。

しかし、この例は、「犯人が誰か」が問題になっているような場面が想定され、そこで、「事件の犯人は××だ」といった事柄を把握していることを言っていると考えられる。従って、こうした問題の事項が特定できているというような意での(10)のような表現は、形式上は、モノがNに出ているが、実質的には「〈事柄〉に気づく」「〈事柄〉を知る」例と考えるべきであろう。こうした例を除くと、「〈モノ〉を知る」例では、専ら「気づく」と「知る」のずれの面が際立ってくるのである。

一方、「気づく」の典型例としては、次のようなものがあげられようが、やはり、「気づく」を「知る」に置きかえることは難しい。だろう。

ⓐ 車に気がついた。
ⓑ 机の上のリンゴに気がついた。
ⓒ うっかりしていた約束に気がついた。

ⓐ'？車を知った。

右のような文は、よほど特殊なコンテキストでなければ容認されまい。しかも、強いて読めば「車とはいかなるものかわかった」意

にでも読めようが、これでは、もとの@の「車があるのに気づいた」といったような意味とは違ったものになってしまう。こうした例でも明らかなように、「〈モノ〉に気づく」例でも「気づく」と「知る」のずれが際立ってくるのである。なお、

(11)—a　車のことに気づいた。

(11)—b　車のことを知った。

のように、Nが「〜のこと」という形をとれば、「気づく」と「知る」とは交換しても文意はさほど違わないが、こうした例はもはや「〈事柄〉に気づく」「〈事柄〉を知る」例である。

以上見てきたように、「〈モノ〉に気づく」「〈モノ〉を知る」のような例では、「気づく」「知る」の意味は、そのずれの面が際立ってくるという3—1での見方は、典型的な例について検討することでも裏づけられた。ところで、以上の典型的な例を見てみると、「気づく」は対象を意識にとらえる意が中心になってくるのに対し、「知る」は対象についての知識・情報を所有する意が中心になるといえる。こうしたずれは、「〈モノ〉に気づく」と「〈モノ〉を知る」の場合に際立ってきたのであるが、基本的にそれぞれについてまわるものではないかとみられる。

3—3　一方、**3—1・2**で見たように、「〈事柄〉に気づく」と「〈事柄〉を知る」の場合には、「気づく」と「知る」の重なりが目立ってくるようである。以上に見た以外にも、次のような例があげられる。

(12)—a　ベルで発車時間を知った。

こうした例は、通常「ベルで」のような「知る」きっかけを示す規定語を伴って、「現在発車時間である」といった現前の事柄を「知る」意を示すが、このような例でも、「知る」と「気づく」を置きかえて、ほとんど意味のずれが生じない。

(12)—b　ベルで発車時間に気づいた。

同様のことは、Nに出来事をあらわす名詞[4]がきて、出来事があったことを「知る」場合にも認められる。aの「知る」は、bのように「気づく」と置きかえても、事柄的意味に大きなずれは生じない。

(13)—a　新聞で東海地方の大雨を知った。

(13)—b　新聞で東海地方の大雨に気づいた。

このように「〈事柄〉を知る」と「〈事柄〉に気づく」の場合、「〈モノ〉を知る」と「〈モノ〉に気づく」に見られたずれは目立たなくなり、「気づく」と「知る」の重なりの面が前面に出てくる。思うに、事柄とは一定の内容をもつものであり、それを意識にとらえることと、いかなることかという知識として保有することとは重なってくるからであろう。

3—4　格の側面から簡単に「気づく」と「知る」のずれと重なりをみてきたが、なお、いくらか注意しておきたいことがある。

まず、「〈事柄〉を知る」と「〈事柄〉に気づく」とは、以上のように重なってくるが、細かにはなおはっきりずれることがある。

(14)—a　解答書を先に見て、正解を知った。

(14)—b ?解答書を先に見て、正解に気づいた。

「知る」は、その知識内容を獲得する方法には特別の含意はない。自分で努力して得ても他からすっかりもらっても「知る」ことになる。しかし、「気づく」はそうではない。知識をすっかり他からもらってくるような場合それは「気づく」ではあり得ない（bのようなことが言えるとすれば、「気づく」主体が解答を飛ばし読みでも

して、ヒント的にしか役立てない場合だろう)。その意味では「気づく」は自力の営みであろう。しかしまた、

(15)—a　それでどうにも、夢さんのことが(／ヲ)知りたくてならなかったのさ。(栗本薫「お役者捕物帳　消えた幽霊」)

(15)—b ?それでどうにも、夢さんのことに気づきたくてならなかったのさ。

の如く、「〜ガ／ヲ知りたい」ということは言えても、「〜ニ気づきたい」とは、ふつうには言いにくい。ということは、「気づく」は自力の営みであっても、自力で「そうしたい」と思ってどうなるものでもないのだということがわかる。思うに、「気づく」には、たまたま、ある対象・事柄にぶつかる・思い至るといった意味がついてまわるのだろう[5]。だから、次のaとbを比べても、

(16)—a　和博は、運よく誤りに気がついた。

(16)—b　和博は、運よく誤りを知った。

aがずっと自然である(bも不可ではないが、何らかのコンテキスト等が必要だろう)。また、次のような例でも、「知る」とおきかえては不自然になる。

(17)—a　そのうちに、はたと気がついたことがあった。言語不明晰で理解できないのも道理、この百姓、恩師、神官等々の姿をした者たちは実は獣だったのである。

(倉橋由美子「獣の夢」)

(17)—b ?そのうちに、はたと知ったことがあった。……

たまたま、ある事柄に思い至るという唐突なニュアンスがある「気づく」でなければ、「はたと」のような副詞とはなじまないのである。

以上述べたことは、「引用」の側面からの分析とも照応してくる節を改めて考察を進めよう。

4—1　最初に、次のような例に注目したい。

(18)—a　角を曲った時、私は車だと気がついた。

(18)—b ?角を曲った時、私は車だと知った。

(19)—a　パリへ来たことを、ストルーフェに知らせておかなかったので、彼の画室のベルを鳴らしたとき、彼が自分で出てきてドアをあけても、しばらくは私だとは気がつかなかった。

(S.モーム(阿部知二・訳)「月と六ペンス」)

(19)—b ?……、しばらくは私だとは知らなかった。

(20)—a　しかし声は出ず、たとえ母ちゃんがその声を聞いたところで、どうして彼だと気がつくだろう。

(福永武彦「退屈な少年」)

(20)—b ?……どうして彼だと知るだろう。

現実にモノに遭遇し、それだと認めるような場合は、「〜ト気づく」の形は言えても、「〜ト知る」の形は不自然である。これは、対象を意識にとらえる意は「気づく」に顕著であって、特に個物の存在を意識にとらえる場合、例えば、「車に気づいた」とは言えても「車を知った」とは言えないことを対応するものだといえよう。

4—2　モノの認知ではなく何らかの事柄内容が意識にのぼる場合は、**2—1**の「引用」の例でも見たように、「気づく」と「知る」とを相互に置き換えても、事柄的意味がほとんど変らないことが多かった。この点は、**3—1〜3**で検討したとおり、格の側面からみても同様である[6]。ただし、事柄内容を対象とした場合でも、「気づ

く」と「知る」の重なりが際立ってくるとはいえ、モノを対象とした場合に認められた両者のずれは基本的についてまわるのではないかということも述べた。この点、以下「引用」の側面から掘り下げてみよう。

次のような例に注目したい。

(21)—a　和博は、どうして誰もいないのかと考えたあげく、今日は休講だったのだと気づいた。

(21)—b？和博は、どうして誰もいないのかと考えたあげく、今日は休講だったのだと知った。

(22)—a　ローザと一緒に逃げようと計画したのは、あれは悪ではなかったのだろうか。しかし、と僕は直に気がついた、その計画は現にまだ実行されてはいないのだと。

(福永武彦「未来都市」)

(22)—b？……。しかし、と僕は直に知った、その計画は現にまだ実行されてはいないのだと。

いろいろ考えて思い至るという文脈では、「知る」は使いにくい。[7] このことも、先の格の側面からの分析と符合するように思える。およそ、心の中に真なる判断をもつということも、細かには順に次の①②の段階があるのではないか。

① 真なる内容の察知（心中にとらえる）

② 真なる内容の保持（心中にそれを是として所有する）

「気づく」はこのうち、①の段階を中心に②も含意するものであり、「知る」は専ら②の段階を示すものである。いろいろ考えた結果、まず到達するのは①の段階であろうから(21)(22)の例では「気づく」が自然なのである。

「気づく」と「知る」の相違を右のように考えることは、先の3—1〜3での分析からしても妥当であろうと思われるが、また、このことは、引用内部のムード的要素の生起制約を比較・観察することからも裏づけられる。

4—3　「知る」は相関する引用句「〜ト」に推量等のムード的要素が生起しにくい。生起したとしても、「ラシイ」などある種のいわゆる擬似ムードに限られる。

(23)—a　彼は佐藤が結婚したと知った。

(24)—a　運転手もこわがっているらしいと知って、藤川は蒼くなった。

(井上ひさし「四捨五入殺人事件」)

(25)—a　締切に間に合わないかもしれないと知って、筆者は慌てだした。

「気づく」は「知る」に比べてその引用内部にムード的要素がずっと生起しやすい。まず、(24)(25)—aのような擬似ムードは容易に生起できる。

(23)—b　彼は佐藤が結婚したと気づいた。

(24)—b　運転手もこわがっているらしいと気づいて、藤川は蒼くなった。

(25)—b　締切に間に合わないかもしれないと気づいて、筆者は慌てだした。

のみならず、次のように、「知る」では生起できない文末形式や感動詞的表現が引用句中に生起できる。

(26)　ディレクターはそのうち自分が台本の督促に来たのではなかったかと気がつくが、そのときはすでに遅い。

(井上ひさし「ブラウン監獄の四季」)

㉗ 徹が旅立ったのは北原と陽子が原因ではないかと、夏枝は今になって気づいた。（三浦「氷点」）

㉘ 「けさ髪の長い子と歩いてたじゃない？」

誠一郎は「法子のことを言ってるのか」と気づいたが、黙って笑っていた。

㉙ 表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅だけであるなと気が付いたら、また急に横町を曲がらせられてまた賑やかな所へ出された。（漱石「坑夫」）

㉚ 智子は、このままでは家までとてももたないだろうと気づいた。

㉛ 自分でもはてなと思うことがある。はてなと気が付かないでもとんだ苦しみを受ける場合が起こってくる。（漱石「坑夫」）

㉛ 戸と障子とガラスの打ち合う音が見る見る激しくなって、あ地震だと気がついた時は、代助の足は立ちながら半ばすくんでいた。（漱石「それから」）

㉝ そうや、赤あざの野田治助が松原の連れであったはずがないと気付いたのだ。（司馬遼太郎「壬生狂言の夜」）

これらは、「気づく」を「知る」と置きかえるといずれも不自然になることからも知られるように、いずれも「知る」の引用内部には生起できないムード的要素である。いわば、「知る」と対比した場合の「気づく」の特徴的な面をうかがわせるものといえよう。そして、それぞれを検討すると、いずれも先の①段階の心の動きとして解釈できると考えられるのである。

まず、㉖㉗㉘の「ではないか」「ではなかったか」「か」だが、これは国研（一九六〇）が判定未定の表現とするものにあたる。[8] 例えば、㉘の場合「気づく」主体の誠一郎は、「法子のことを言っているのだ」という正しい事実に思い至るが、なおそうであるとして心の中で認めきれない（つまり②として心に落ちつかせられない）段階、つまり①段階の心の動きが「か」に託されているといえよう。㉖㉗の「ではなかったか」「ではないか」も同様である。

次に、㉙の終助詞「な」だが、内的引用（「〜ト思ウ／気ヅク」のように心内の思惟認知がひかれる「引用」）では、納得・自問自答的な気持ちを示すことが多い。この点は、北川千里（一九八四）が「な」を「発言が一人称事項に関することを表示する」[9]としていることからも理解できるだろう。とすると、こうした「な」は、一つの妥当である（らしい）事柄に思い至り、それを是として心に落ち着かせる、つまり、①から②へ向かう心の動きを示すものといってよかろう。

それから、㉚の「だろう」だが、これは最も主観的な推量の表現であり、「らしい」が「らしかった」のような過去形をもつのに対し、過去の形をもたないことからもわかるように、その思惟・発話の現場に密着に結びつけられた心の動きを示すものといわれる。従って、それは（**3**—**4**でも見たような）たまたま思い至った・察知した内容を、そこで、確かではないがそう思うという気持ちで意識にのぼらせるといった①段階の心の動きを示すものといえよう。なお、この点、尾上圭介（一九八七）の「推量という一つの現場的行為そのことの表現であるとする把握においては、推量の文は、感嘆文や希求文と共通の世界に属するということになる」[10]との指摘は、次の感動詞的表現のあらわれることとの関連性をいうかのようで、興味深い。

最後に、㉛㉜㉝のような感動詞的表現だが、感動詞とは、そもそも何らかの事柄に直面して、それを未分析のまま全的にとらえるものであるとされる。ところで、「気づく」という営みは、たまたま正しい対象・事柄にぶつかるという面をもっているということは、3—4や右にも考えたとおりである。その「ぶつかる」ということが「察知」ということの中心といえようが、そうすると、引用内部に感動詞的なものが出てくるということは、正しい（といえる）事柄に遭遇してそれを全的・未分析にとらえたもの、つまり①段階の「察知」の表現なのだといえよう。

以上、「気づく」の引用内部には、「知る」に比べて多様なムード的要素があらわれるが、これは、「気づく」が真なる内容の把握において、それを「察知」することに重点があることによるものだと解される。

4—4 もう一つ付け加えたいのは、次のような例である。

㉞—a 光秀が裏切るのではないかと気づいたが、そんなことはあるまいと捨てておいた。

右のような表現は十分可能であろう。しかし、「知る」の場合、右のような表現において用いることは難しい。もちろん、「ではないか」のようなムードは「知る」の引用内部に生起できないが、「かもしれない」のようなムードを生起させて次のようにしても不自然であろう。しかしまた、「知る」を「気づく」に置きかえると十分許容できそうである。

㉞—b ？光秀が裏切るかもしれないと知ったが、そんなことはあるまいと捨てておいた。

㉞—c 光秀が裏切るかもしれないと気づいたが、そんなことはあるまいと捨てておいた。

これは、「気づく」は正しい事柄内容を察知しても、それを是と認めて心の中に落ちつかせない場合もあるが、「知る」は、それを正しいものと認めて心の中に保持することに本質があることを示すものだろう。だからこそ、bのようにすると矛盾するような印象があると解釈できる。一方、「気づく」は、むしろ正しい事柄を察知する点にこそ重点があるとみられる。

真なる内容を察知すれば、通常、それを心の中に落ちつかせ保持するものと推論されるのが自然であろう。故に、真なる内容の察知（①段階）は、その是認・保持（②段階）を含意するのがふつうである。それ故、「気づく」と「知る」とは一面では同義的に用いられるのだが、しかし、㉞—acのように、察知しても保持しないこともあり得る。この点にも「気づく」の意味する心の動きの本質があらわれているのである。[11]

以上、3の格の側面から考えたことを、この4の「引用」の側面からの分析が支持し、また、いくらかは掘り下げられたかと思う。

5—1 最後に、ここで併せて、「悟る」に関してふれておこう。「悟る」は、特別の哲学・宗教的コンテキストではなく日常的な用法で用いられると、2—1でもみたように、「気づく」「知る」とも極めて接近してくる。しかし、やはり、ある種の含意がついてまわるようであり、それが「悟る」という動詞の意味-文法的なふるまいにも反映している。格の側面にかかわって、二つの点を指摘しておきたい。まず、3—1の言い方にならえば「〈モノ〉を悟る」ことはふつうない。「悟る」対象は通常事柄である。ただ、手許の例では、次のようなものが見つかった（この場合の「悟る」は「知

る」に近いだろう)。

(35) 勿論、すっかり世の中を悟ったと云ふやうな人は別かもしれないが、……

(宮本百合子「貧しき人々の群れ」)

しかし、こうした用法は今日ではほとんど見られないと思われるし、こうした例がいくらかあるにせよ、ヲ格に立つのは「世の中」のような抽象的・高踏的な語に限られよう。「悟る」の意味するところのある種の傾向がうかがわれるようでもある。

また、「〈事柄〉を悟る」場合でも、次のような表現はとれない。

(36)—a 捕虜がやがて死ぬことはだれでもが知っている。

(遠藤周作「海と毒薬」)

(36)—b 捕虜がやがて死ぬことにはだれでもが気づいている。

(37)—c ?捕虜がやがて死ぬことはだれでもが悟っている。

「だれでも(が)悟る」というような表現はとれない。ということは、「悟る」ということは、必ずしも誰にでもできるようなありふれた営みではないようである。

5—2 「引用」の側面からは二つのことが指摘できる。まず、ムード的なものは、用例が乏しいが、およそ「気づく」と同様に出てくるようである。そうした点でも、「知る」よりもむしろ「気づく」の「事柄を意識にとらえる」といった語感に近いものが感じられる。

(37)—a これも一つの生き方だと悟った。

(37)—b これも一つの生き方ではないかと悟った。

(37)—c これも一つの生き方かもしれないと悟った。

(37)—d これも一つの生き方らしいと悟った。

(37)—e これも一つの生き方だろうと悟った。

(38) 三四郎は、淀見軒で与次郎からライスカレーをご馳走になったものは自分ばかりではないのだなと悟った。

(漱石「三四郎」)

ただし、「あっと悟った」「しまったと悟って……」のように感動詞が出てくることは難しいと思われるが、次のような例もあり、全く不可とはいえぬようである。

(39) 辻馬車とロマンスに至って敬太郎は少しわからなくなったが、思い切ってその説明を聞いてみて、始めてなるほどと悟った。

(夏目漱石「彼岸過迄」)

しかし、明らかに「気づく」と異なる点は、次のような例に見られる。[12]

(40)—a だまされたと気づいて、あきらめた。

(40)—b だまされたと気づいて、怒った。

(40)—c だまされたと気づいて、やけくそになった。

(40)—d だまされたと気づいて、気が狂った。

(41)—a だまされたと悟って、あきらめた。

(41)—b ?だまされたと悟って、怒った。

(41)—c ?だまされたと悟って、やけくそになった。

(41)—d ?だまされたと悟って、気が狂った。

「悟る」の場合、「悟った」結果「怒った」「やけくそになった」のような愚行に走ったり「気が狂った」りするという文脈は不自然となろう。ということは、「悟る」には「気づく」と異なって、「賢明になる」というようなニュアンスが、日常的な用法でも大なり小なりついてまわるようである。

6 以上、「気づく」を「知る」と対比しつつその特質を浮かび上がらせようと試み、あわせて、「悟る」にも言及した。これらの語

によって示される我々の真理認識の営みを、こうした分析を通して、（少なくとも我々がことばに即して直観している限りで）少しく明らかにし得たかと思う。「気づく」については、なお、別に考えるべき問題もあるが、それは引き続き別稿を期すことにしたい。

（一九八八、九、四　稿）

＜注＞

（1）　前提は、否定によって真偽値に影響をうけないとされる。事実、
ア―a　彼はそれが正しいと思わなかったが、実際それは誤りだった。
ア―b？彼はそれが正しいと知らなかったが、実際それは誤りだった。
のように、「知る」の場合、「知らなかった」という否定形をとっても、「〜ト」の内容は真である（「気づく」「悟る」も同じ）。

（2）　動詞が引用句「〜ド」をとる形でその思惟・認知の内容を示す「引用」の場合、動詞は「叙実動詞」とならないという見方（久野（一九七三）など）があるが、明らかに性急な一般化であって、こうした例を見れば妥当とはいえない。また、久野を批判的に受けとめている山本は「引用句」の意味的性格を正当な方向でおさえながら、やはり「〜ト」をとる場合は非叙実的と見るらしい（S. 80）。しかし、引用句に出てくる「補文命題が、話し手ではなく認識の主体あるいは、動作主に帰属する」からといって、「補文標識『と』がもっていると考えられるこの（認識主体の）主観性」が必ずしも「命題内容に対する叙実性を排除する」ことにならないのは、この稿の例でも明らかである。
なお、この種の叙実動詞として、この稿では扱わないが、「わかる」「見破る」「見抜く」「勘づく」などがある。

（3）　「引用」の概念規定については、藤田（一九八六）（一九八八）など参照。

（4）　森山（一九八八）の「出来事名詞」。

（5）　「たまたま」というニュアンスは、情報源・手がかりの問題ともかかわるようである。
イ―a　筆跡を見て、母から来た手紙だと知った。
イ―b　筆跡を見て、母から来た手紙だと気づいた。
ウ―a？封筒を見ただけで、母から来た手紙だと知った。
ウ―b　封筒を見ただけで、母から来た手紙だと気づいた。
「知る」は、大抵誰でも確かにわかる方法や手掛りによって情報を得るという趣きがあるが、「気づく」はひょっとして他の者なら見落してもしまうかもしれない不十分な、あるいは一般的でない手掛りで運よく思い至るといった場合もあり得る。故に、ウ―bのようなことも自然なのである。本文の(6)―bも、おそらく「運よく確かな情報を得る手掛りに出会った」ので、当然のことながらそれで誤りを知った」といった事柄を言うものと解せられる。ただし、「一を聞いて十を知る」のような諺もあって、そうした知識にひかれて判定が揺れることもあるのだろう。「知る」は、古典語ではおそらく「気づく」の意味領域をもカヴァーしていたのではないかと思われるが、別に考えたい。

（6）　ただし、事柄をあらわす名詞節がヲ格に立つ場合でも、「知る」が、体験的な意味が強くなる場合など、知識所有の意が後退すると「気づく」と置きかえにくくなる。
エ　自分は広間のまん中に立ってこの雄大な絵をかいた昔の日本人を尊敬する事を父のおかげでようやく知った。（夏目漱石「行人」）

（7）　森田（一九七七）の「しる」の記述の中に、「しばらく考えれば知るでしょう」といった文の不適格性について「もともと脳中に存在しないものを、考え出すことはできない」と述べているか、ややわり切りすぎのきらいかあろう。存在しない知識も、推論等脳中の材料を使うことで作り出せるからである。むしろ、「知る」が「保持」という点に重点のある意のため、「考える」ことの結果（把握のプロセスなしに）いきなり「知る」（知識保持）となることの唐突さが不自然なのだろう。

（8）　国研（一九六〇）S. 105 f

（9）　北川（一九八四）S. 32 f

（10）　尾上（一九八七）S. 70

（11）　また、否定推量の形にしても、こうした両者の相違がはっきり出る。不確定の推量なので、（確定した）結果的に同じ事柄を指すというような読みが生じず、しかも動詞の意味の焦点に対して否定が働くので、相違がはっきりするのだろう。
オ―a　そのことに気づかないだろう。
オ―b　そのことを知らないだろう。

(12) 「悟りたい」とはふつう言えないし、「はたと悟った」等とも言える点でも、「悟る」は「気づく」と近い。しかし、「〜ではないかと気づいたが、そうではあるまいと思って、……」のような表現があり得るのに対して、「〜ではないかと悟ったが、そうではあるまいと思って……」のような表現はとれない。この点、「悟る」は「知る」に近く、意識にとらえた内容を是と認める方向にあるようである。

〔参考文献〕

国立国語研究所〈宮地裕他〉(一九六〇)『話しことばの文型(1)』秀英出版

久野　暲(一九七三)『日本文法研究』大修館書店

森田良行(一九七七)『基礎日本語1』角川書店

北川千里(一九八四)「発言の階層構造と『ことば』の主体性」(『日本語学』3—8)

山本英一(一九八七)「認識の様態と補文標識」(小泉保教授還暦記念論文集編集委員会(編)『言語学の視界』)

尾上圭介(一九八七)「日本語の構文」(『国文法講座6』明治書院)

森山卓郎(一九八八)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

藤田保幸(一九八六)「文中引用語『〜ト』による『引用』を整理する」(宮地裕(編)『論集日本語研究(一)現代編』明治書院)

———(一九八八)「『引用』論の視界」(『日本語学』7—9)

〈付記〉この稿の4の趣旨の一部は、拙稿(一九八八)に研究例として紹介したことをお断り申し上げる。

——愛知教育大学助手——